第11章　小学校教員の新たな教育内容（多様性、地域連携、持続可能性）への取組状況と多忙化

谷田川ルミ
（芝浦工業大学教授）

はじめに

本章では、社会の変化と教育政策の動きに応じて学校に求められている様々な取組に対して、小学校の教員がどの程度取り組んでいるのかについて概観する。

近年、社会状況や子どもたちの変化に応じて、様々な新しい教育的な取組が求められるようになってきている。例えば、多様性に関わる内容（多文化・共生教育、多様な性に関する教育）、地域や学校の歴史や文化に関する教育、地域資源を活用した教育、SDGsやESDといった持続可能性に関わる教育、生徒の将来や人生について考えさせる教育（キャリア教育）などが挙げられる。

これらの教育内容は、外国につながる子どもの増加や様々な家庭背景を持つ子ども、性に関わる問題など、多様性社会を生きる子どもたちにとっても、多様な背景を持つ子どもたちの教育にあたる教員たちにとっても、非常に重要なものであると考えられる。また、地域社会との連携やSDGs、ESDといった持続可能性に関わる教育については、新学習指導要領の中でも求められているものでもある。

一方で、新たな教育内容を多忙と言われている日本の小学校教員が、過密なカリキュラムの中に取り込んでいくのは容易ではないものと考えられる。

本章においては、こうした新たな教育内容に対して、小学校教員たちがどの程度取り組んでいるのかについて、性別、年齢、学校規模、担当する学年別に見ていくこととする。また、教員の多忙感との関係についても確認することとする。

1　新たな教育内容への取組状況の現状

1）全体の傾向

まず、全体の傾向を見てみる。小学校の教育にもっとも取り入れられている取組としては「ひとり親家族への配慮」、次いで「障がい者への配慮」となっている（**図11-1**）。

これらの項目は、「とても行っている」と「やや行っている」を合わせると９割以上となっており、現在の小学校教育においては、家庭的な事情への配慮や障がいへの配慮を取り入れた教育は、日常的に行われているものと考えられる。

続いて、「異なる文化的背景を持つ人への理解」「学校外の資源を活用する」「職業や人生について考える活動」「学校の伝統や文化の継承」といった項目が続いており、これらも「とても」と「やや」を合わせると８割以上が、教育に取り入れられていることが見て取れる。

一方で、「多様な性への理解」「持続可能性に関わる活動」は、「とても行っている」割合は１割超と低くなっており、「やや行っている」を入れても６割超にとどまっている。「多様な性への理解」については、三重県の高校生を対象とした調査においては、１割程度がLGBTであると自

覚しているとの結果となっており、学校教育においても早いうちから、多様性の一つとしての教育が求められている（教育新聞2018年３月19日）。

また、「持続可能性に関わる活動」についても、気候変動が進み、脱炭素が世界的な目標となっていることもあり、小学校におけるSDGsの取組なども行われている。

しかし、これらのトピックの内容や科学的な背景が、小学生には難しいということも、なかなか導入が進まない理由の一つと考えられる。

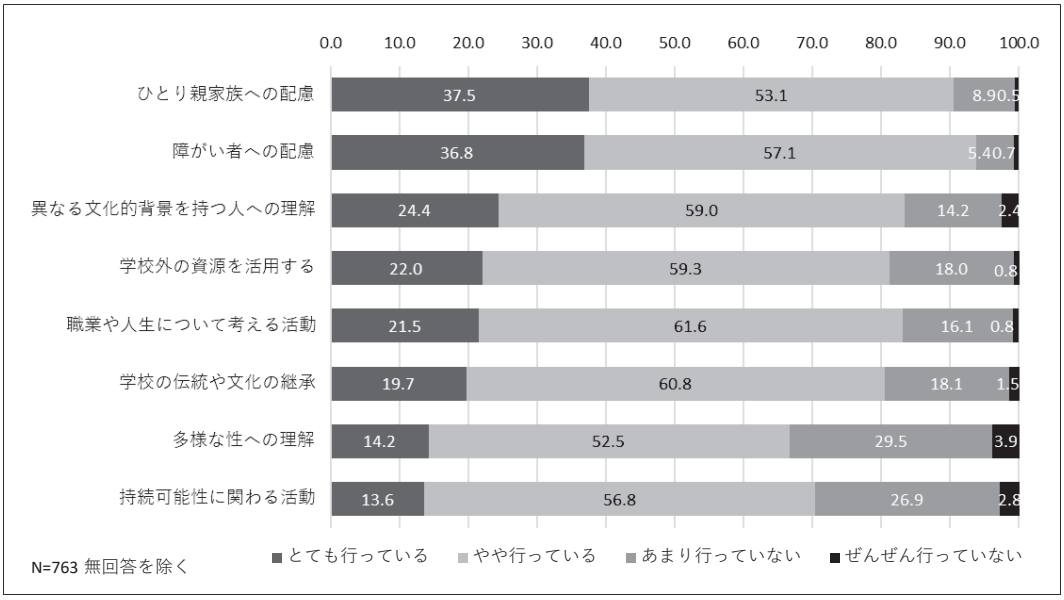


図11-1　新たな教育内容への取組状況（全体）

２）教員の性別による取組の違い

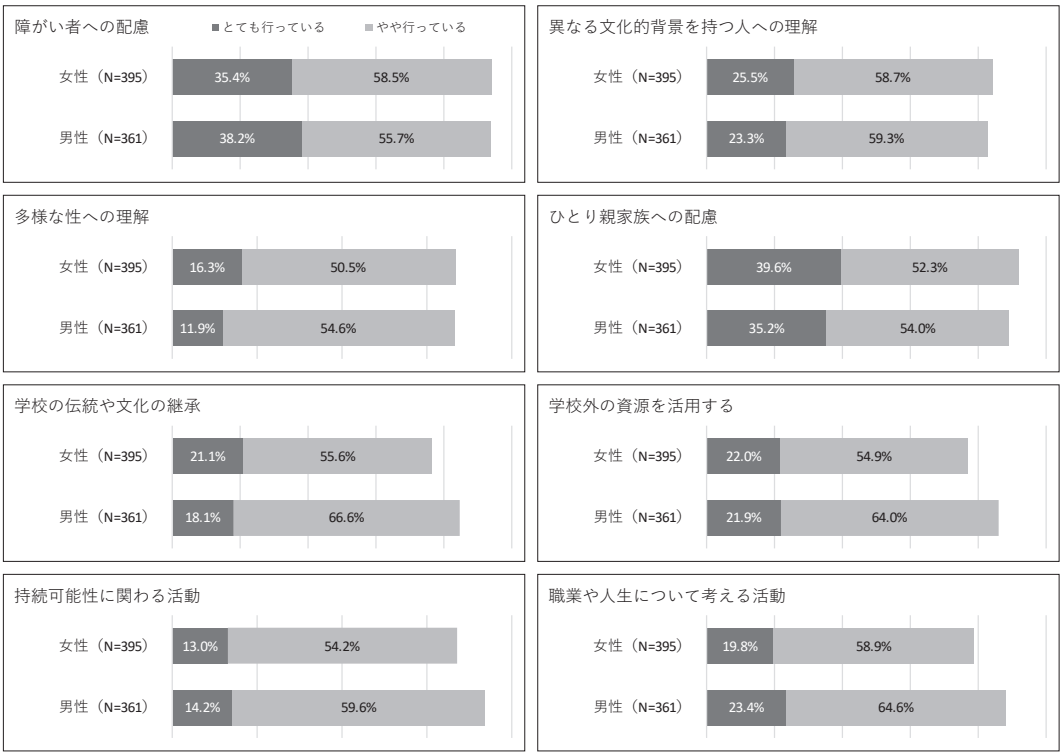
続いて、教員の性別による違いを見ていく。

「障がい者への配慮」については、性別の差はほとんど見られない。

「異なる文化的背景を持つ人への理解」「多様な性への理解」「ひとり親家族への配慮」については、女性教員のほうが男性教員よりも「とても行っている」と回答する割合が高くなっている（**図11-2**）。

一方で、「持続可能性に関わる活動」「職業や人生について考える活動」については、男性教員のほうが女性教員よりも取り組んでいる割合が高くなっている。

女性教員は男性教員と比べると、「異なる文化的背景を持つ人への理解」や「多様な性への理解」、「ひとり親家族への配慮」といったケアの性質の高いトピックを教育に取り入れている傾向が見られている。



無回答は除く

図11-2　新たな教育内容への取組状況（性別）

3）年齢別

教員の年齢によって、新たな教育内容への取組状況に違いは見られるのだろうか。教員の年齢を「29歳以下」「30～39歳」「40～49歳」「50～60歳」「61歳以上」の５つのカテゴリーに分けて確認する。

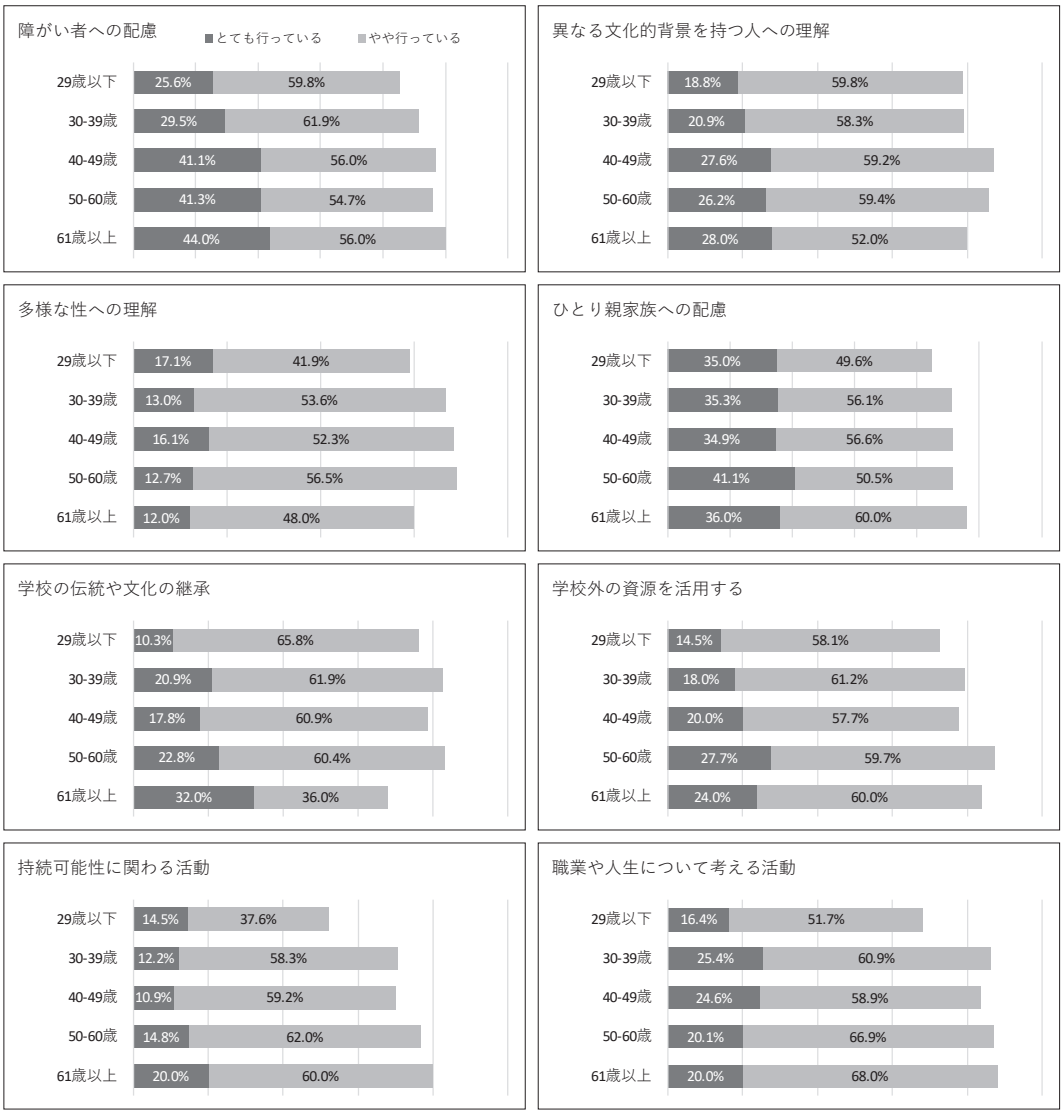
全体的に年齢層の高い教員が積極的に取り組んでいる様子が見て取れる（**図11-3**）。「障がい者への配慮」「異なる文化的背景を持つ人への理解」については、40歳以上の年齢の教員が「とても行っている」と回答する割合が高くなっている。

「ひとり親家庭への配慮」「学校外の資源を活用する」については、「50～60歳」が「とても行っている」と回答する割合が高い。

また、「学校の伝統や文化の継承」を「とても行っている」と回答しているのは「61歳以上」が高くなっている。

一方で、「多様な性への理解」「職業や人生について考える活動」については、20～50代の若手、中堅の教員が積極的に取り組んでいる。

近年になって社会的に取組を要請されている新しい教育内容については、若い年代の教員のほうが取り入れているイメージがあるが、今回の調査結果からは、年齢層の高い教員も新たな教育内容を教育の中に積極的に取り入れている傾向が見られている。



無回答は除く

図11-3　新たな教育内容への取組状況（年齢別）

4）学校規模別

続いて、学校規模による新たな教育内容への取組の違いについて見てみる。

小学校の規模については、学校教育法施行規則第41条において「小学校の学級数は、十二学級以上十八学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情があるときは、この限りでない」とされている。本調査においては、調査対象の教員が所属する学校規模を「５学級以下」「６-11学級」「12-24学級」「25-30学級」「31学級以上」の５つのカテゴリーに分けて聞いている。

「ひとり親家族への配慮」「学校の伝統や文化の継承」「学校外の資源を活用する」「持続可能性に関わる活動」については、「５学級以下」の過小規模校において「とても行っている」割合が高くなっており、全体的に小規模校で新たな教育内容に積極的に取り組んでいる様子が見て取れ

る（**図11-4**）。

文部科学省は、平成27年度に出された「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」の中で、小学校の学校規模について「児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくという学校の特質を踏まえ、小・中学校では一定の集団規模が確保されていることが望ましい」としている。

「５学級以下」の過小規模校においては、教員の人員が限られている中で、多様な形態の教育活動を行うことに制約が生じたりすることが考えられるが、今回の調査結果からは、こうした過小規模校の教員が新たな教育内容に積極的に取り組んでいる様子がうかがわれる結果となった。

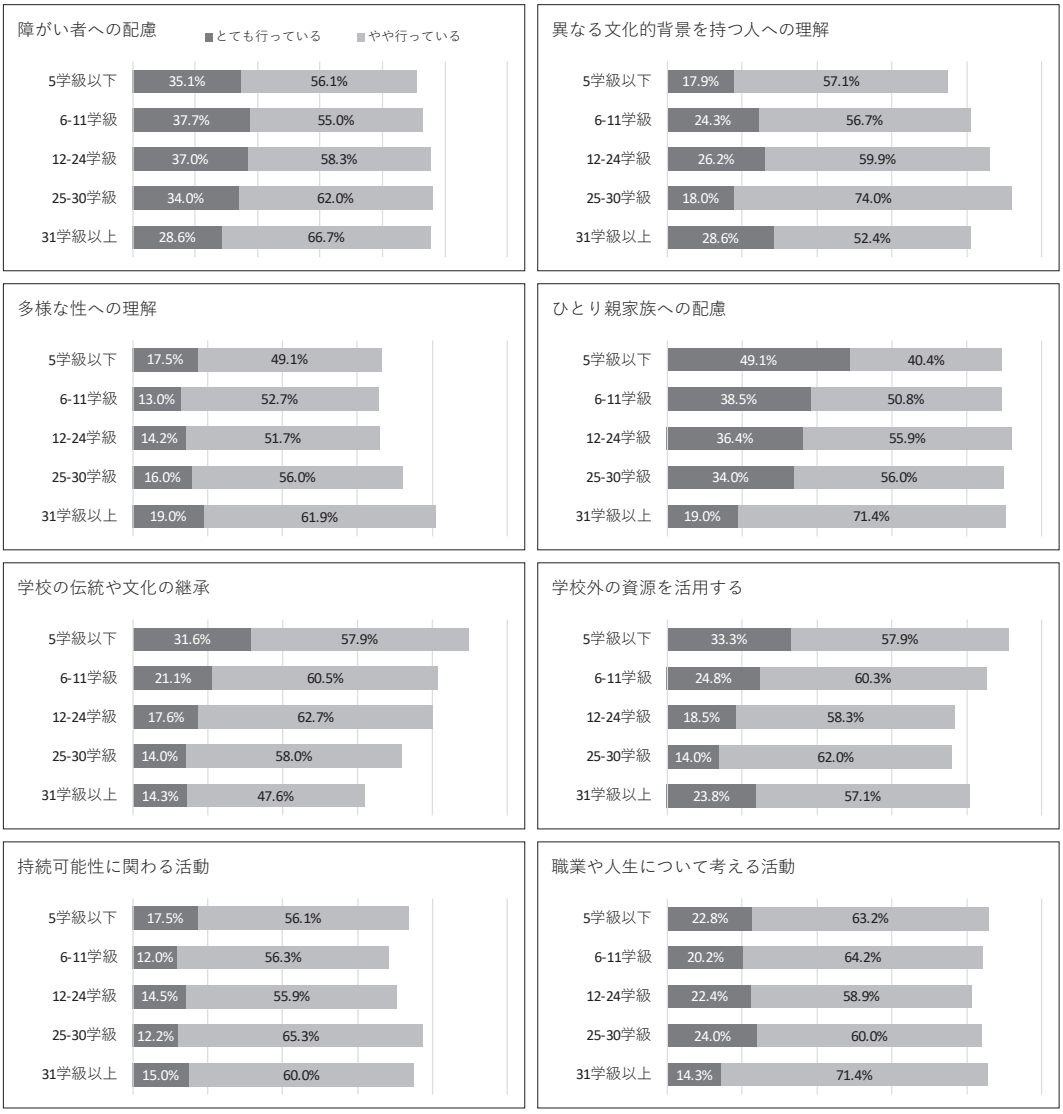
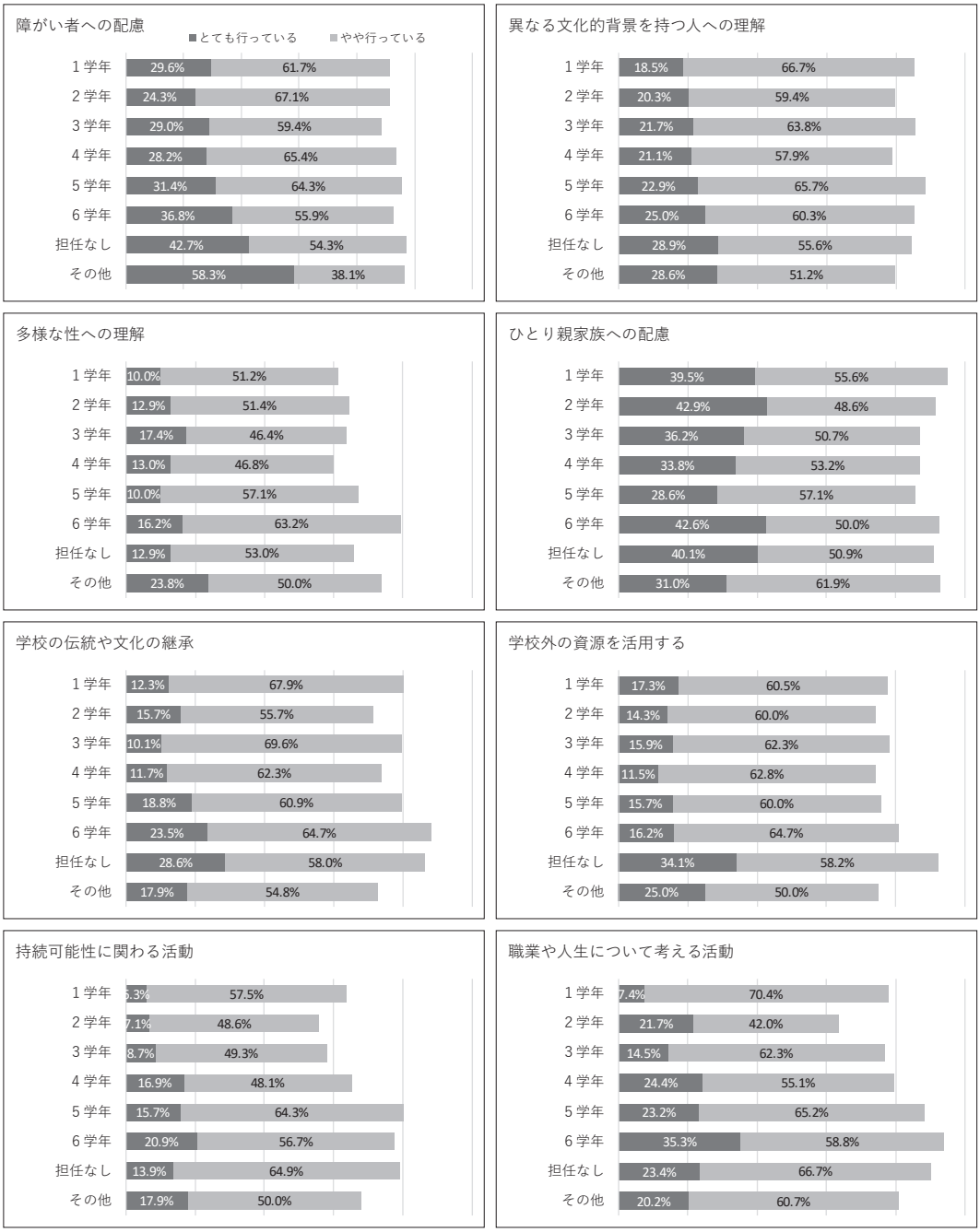


図11-4　新たな教育内容への取組状況（学校規模別）

5）担当する学年別

「障がい者への配慮」「異なる文化的背景を持つ人への配慮」「ひとり親家族への配慮」といった、多様な背景を持つ人への配慮については、高学年になるにつれて「とても行っている」の回答割合がやや増加する傾向が見られる。この理由としては、新たな教育内容は、多様性や持続可能性など、内容的に低学年には難しいものが多いためと考えられる（**図11-5**）。



無回答を除く

図11-5　新たな教育内容への取組状況（担当学年別）

「多様な性への理解」については、「６学年」の担当教員において、「行っている（とても＋やや）」の割合が高くなっており、思春期の入り口における性に関する教育と合わせて実施されている可能性が考えらえる。

「職業や人生について考える活動」も「６学年」の担当教員が「とても行っている」割合が急増しており、中学校に進む前において、自身のキャリアを考えさせる教育内容を扱っている様子がうかがわれる。

また、「持続可能性に関わる活動」も「５学年」「６学年」の担当教員が「とても行っている」割合が高くなっている。これは、SDGsやESDには内容的に低学年には難しいものも含まれているため、高学年において取り入れられているものと考えられる。

「学校の伝統や文化の継承」「学校外の資源を活用する」については、「担任なし」の教員が取り組んでいる様子がうかがわれる。地域と連携するような教育活動は、学級担任を持っているとなかなか時間が取れず、積極的に取り組むのが難しいところがあるということがうかがわれる結果となっている。

２　新たな教育内容への取組と多忙感との関係

こうした新たな教育内容は、「総合的な学習の時間」や特別活動の際に行われることもあれば、通常の教科教育に関連づけて取り入れられることもあるだろう。しかし、小学校教員は多忙であることは、以前から指摘されており、今回の調査からも明らかになっている（第14章参照）。日々の多忙な教育活動に加えて、新たな教育内容に取り組むことは、容易ではないものと考えられる。ここでは、小学校教員の多忙感と新たな教育内容への取組の関係を見ることとする。

多忙感については、「とても忙しい」「かなり忙しい」「あまり忙しくない」「忙しくない」の４件で聞いているが、「とても忙しい」が52.4％、「かなり忙しい」が42.6％の回答割合となっているため、「とても忙しい」を「多忙感・高」、「かなり忙しい」を「多忙感・中」、「あまり忙しくない」「忙しくない」を「多忙感・低」として分析を行った。

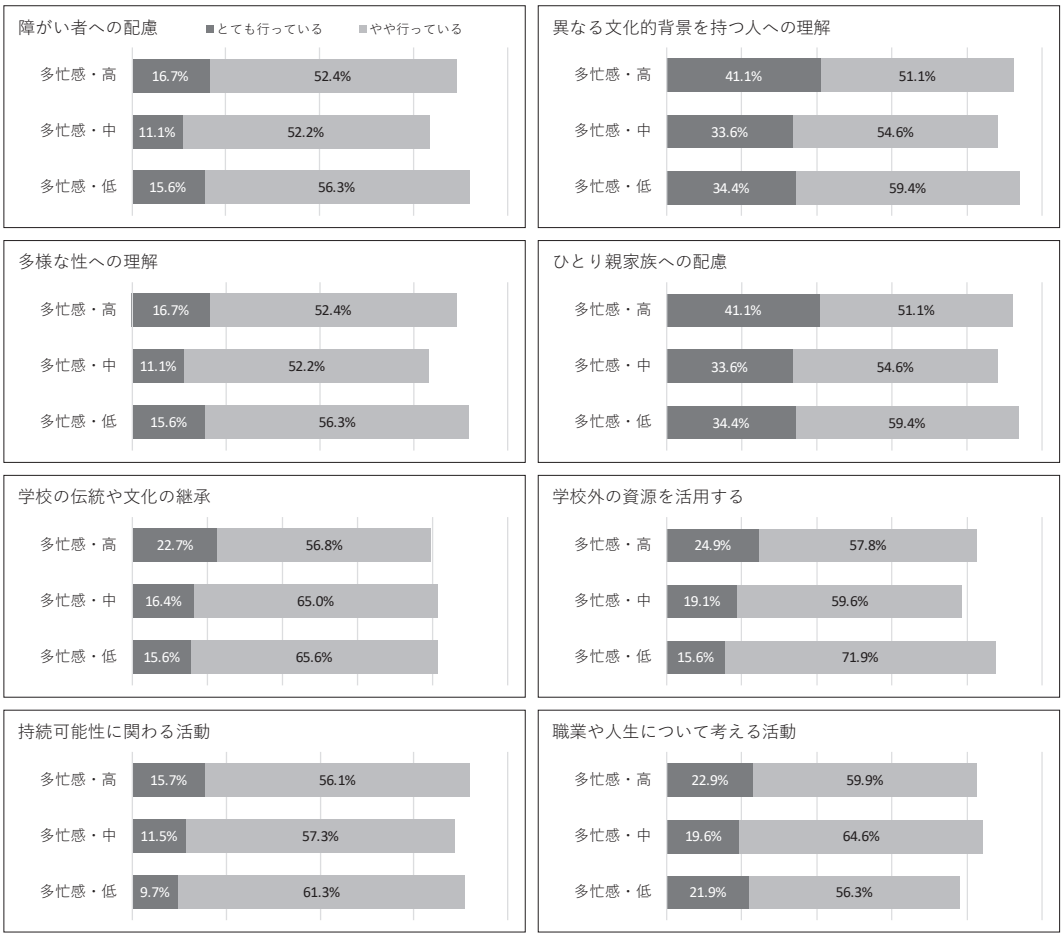
全体的に新たな教育内容を「とても行っている」と回答している割合が高いのは「多忙感･高」の教員である（**図11-6**）。多忙な中で、さらに新たな教育内容への対応が重なると、さらに多忙になるものと考えられる。また、積極的に新たな教育に取り組む教員であるから、多忙感が増すという見方もできる。

新たな教育内容は、子どもたちの変化や社会の変化からの要請が反映されているものであり、学校教育で扱うのは重要なことではあるが、学校教育現場の教員の負担が増えることにも配慮する必要があるものと考えられる。

３　自由記述から

新たな教育内容の導入についての自由記述を見てみると、

・多様性に応じていかねばならない。違いを受け入れ、また日本人としての誇りを持つ子の育成が進んで欲しい。
・多様化する社会に対応する力をつけるために、情報処理能力、ICTを使いこなす力、考えを生み出す力など、今までとは違った学力が必要になってくる。今までの良さも充分取り入れなが



無回答は除く

図11-6　新たな教育内容への取組状況（多忙感別）

ら、古いもので必要のないものは、思い切って切り捨て、新しいものに変革していくことが必要である。教師にも試行錯誤しながら新しいものを生み出す力が必要。

・「多様な価値観」「多様性」という言葉が一人歩きして「勝手気まま」まで容認されるようであってはならない。教えるべきことはきちんと教え、よく考えさせて、その子にあった人生の歩み方を見つけさせる入り口としての小学校の役割を忘れてはならない。

・新しいことを取り入れることは大切だが、それだけでは学校はパンクする。入れた分何を削るのか明確にし、これ以上負担がかからないようにしたい。

・学習内容が増え、児童も教師も多忙な生活となっている。もう少しゆとりあるカリキュラムとなっていくことが望ましい。

といったように、変化の速い、多様化が進んだ社会に対応できる子どもをしっかりと育てたいという教育理念を持った教員の声が聞かれている一方で、新たな教育内容を導入する重要性は理解するものの、カリキュラムの上に上乗せする形での導入は、学校全体の多忙化につながるとの声も聞かれている。

近年、カリキュラムに上乗せし続けた内容が増加しており、教員の負担になっているという「カリキュラム・オーバーロード」が問題となっている（奈須2021）。多様性などの新たな教育内容を効果的に教育に入れていくためにも、カリキュラムが過重にならない工夫を考えていく必要があるだろう。

まとめ

本章における知見をまとめると以下のとおりとなる。

① 現代の小学校の教育では、「ひとり親家族への配慮」「障がい者への配慮」など、家庭的な事情への配慮や障がいへの配慮を取り入れた教育が日常的に行われている。
② 女性教員は男性教員に比べて、「異なる文化的背景を持つ人への配慮」「多様な性への理解」「ひとり親家族への配慮」といったケアの性質の高いトピックを教育に取り入れている傾向が見られている。
③ 新しい教育内容については、若い年代の教員のほうが取り入れているイメージがあるが、今回の調査結果からは、年齢層の高い教員も新たな教育内容を教育の中に積極的に取り入れている傾向が見られている。
④ 「５学級以下」の過小規模校においては、教員の人員が限られている中で、多様な形態の教育活動を行うことに制約が生じたりすることが考えられるが、新たな教育内容に積極的に取り組んでいる様子がうかがわれる。
⑤ 「障がい者への配慮」「異なる文化的背景を持つ人への配慮」「ひとり親家族への配慮」といった、多様な背景を持つ人への配慮については、全体的には学年にかかわらず、取り組んでいる傾向が見られている。「多様な性への理解」「職業や人生について考える活動」は高学年の担当教員がよく取り組んでいる。
⑥ 全体的に新たな教育内容を「とても行っている」と回答している割合が高いのは「多忙感・高」の教員である。多忙な中で、さらに新たな教育内容への対応が重なると、さらに多忙になるものと考えられる。

〈参考文献・参考資料一覧〉

教育新聞「高校生１万人調査 LGBTの60％、いじめ被害を経験」2018年３月19日.
文部科学省（2015）「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2015/07/24/1354768_1.pdf（2022年６月15日閲覧）.
奈須正裕（2021）『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業のつくり方　―脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋―』ぎょうせい.